

無縫社会とどう向き合うか ~遺品より、おひとりさまの声を聞く~

吉田太一氏(キーパーズ有限会社・吉田物流株式会社代表取締役)

● 「天国への引越しお手伝い」

8年前に、遺品整理専門会社を日本で初めて立ち上げ、現在、年間1500件以上の仕事をお受けしています。拠点は、札幌、東京、名古屋、大阪、福岡、富山、韓国です。10年近く運営、引越し、リサイクルを行ってきましたが、あるとき、僕らあるご遺族と出会って、この遺品整理サービスの必要性に気付きました。

遺品はみんなが生きている間に使っていたもので、「気持ち悪い」とする理由は全くありません。その人が氣に入っている間に使って買ってきた、家で大切に使用していた物です。テレビも、冷蔵庫も、照明も、蒲団も、夫々に愛着を持って、一人住まいの暮らしを見守り、癒してくれていたベットのような存在なのです。

しかし、「一人住まい」のその後生じてみると、遺品となたぬき道具はそのまま放置されて、誰も使ってくれなくなるのです。私たちは、それを遺族になり代りお片づけをするのです。キーパーズの各支店では整理が置いてあり、そこへ遺品を並べ、故人のお気持ちを考えて、無償で供養してから処理しています。この供養を「天国への引越しお手伝い」といい、当社のキッズフレーズにもなっています。(ここで20分間のDVD『孤獨老人の孤獨死』を放映)

このDVDはとても評判がよく、全国の市町村などいろいろな所から希望があり、主催無償でお配りしています。孤獨死の現実を知って頂き、他人事ではないことにショックを受け、自ら孤獨死を回避したいという気持ちを持つてもらうために作成しました。

● 孤立死に多い年代は、50代後半から60代の頃
孤獨死に至った方で、意外に多いのが50代後半から60代の前半の方で、特に男性が圧倒的なのが現状です。孤獨死という、孤獨老人というイメージがありますが、ある時現場に行って、「意外にお若いですね」と、遺族とよく話している自分に気付いたのです。これには、1970年前後から、自営業者と給与所得者の比率が変わってきたことに起因しているのではないかと思うのです。自営業者は比較的の自立度が高くなりますが、その割合が変わったサラリーマンがどんどん増え、依存性の強い人が増加したのがカイロス 45号



です。当時は、給料が年々倍増するなどのバラ色の人生でした。そして、それはずっと続くものだと錯覚していたのです。しかし、数年後、リストラが始まりました。30年勤め、30年信頼していた相手から、「辞めてくれ」と言われ、裏切られたのです。こうなると、もう誰を信用したらいいか判らないですよ。信用できる人がどこにいるか判らない状態では、中年の男の人は、引きこもるしかないのです。会社に裏切られて家に帰っても、娘もいない、持ち家もない、友だちもいない。そういう人たちがすごく多いのではないかとうか。このような状況にある人たちが部屋で倒れたときに、誰かに気づいてもらえるはずはありません。そう、孤獨死となるのです。

● 孤立死しないようにするために

孤獨死する人にならないために一番必要なのは、「健康」ではないでしょうか。精神的、身体的、社会的、経済的因素、この4つの「健康」がバランスよく保てないと、世の中で「健康」に生きていることにはなりませんし、バランスが取れて

2010年12月

いれば、社会から孤立することはあり得ないのであります。ところが今は、昔と違って、バランスがとれていられない状態でも生活ができるようになりました。コンビニがあり、ワンルームマンションがあり、その中に引きこもってしまうことができるのです。孤獨死された方の部屋を見ると、中は汚く、電化製品などの一部が壊れたままで、修復もせずにそのまま使っていることが、非常に多いのです。

特に問題なのは、社会的不健康=人間関係の喪失です。喧嘩をしても、仲直りをせず、人間関係を修復しないまま放置してしまい、孤獨した生活を送っているのです。バランスを保つための作業を全て放棄しているという現象が、部屋の中の隠れ所から見えてくるのです。

孤獨死というのとは、一人詳しく孤獨して生きている人が死ぬことをいいますが、「孤獨死」が問題なのではなく、「孤立状態で生きている現状」が問題なのです。また、孤獨死をすると、どれだけ世間に迷惑をかけるかということを知ることは、とても重要なことです。孤獨死をする可能性は、他人と協調が苦手で、プライドが高すぎて、人に「助け」とは言えない人で、どうしても男性が多くなります。しかし、男性が自らプライドは捨てて、「助けて」と言える勇気を持てば、お手伝いをして下さるお世話を好きの女性が、今も沢山おられるそうですので、お願いしてみてはいかがでしょうか?

● アパートの大蒙さんには意識改革が必要

日本では、親子の問題が当たり前でしたが、近年同居が物質的に難しくなり、離れて暮らし、家族の生活形態が変わつきました。同居していくのが叶わなければ孤獨死を防ぐのですが、家族がそれぞれ孤立化(家族離散)しているのが現状です。

また現在は、人口が減って、賃貸アパートに空き部屋が目立ち、なかなか入居者が入らない状況ですので、新たな対策を講じないと賃貸需要も成り立たなくなってしまいます。そこで大家さんが主体となり、住民がより住み易く、楽しく過ごせるようなコミュニティを作っていくことにより、不動産価値を高めていくことが重要になります。アパートやマンションは、同じ戸建の下で暮らしている共同住宅ですから、ある意味では同居していると言えるので、住民同士のコミュニティを作りやすい環境があるのです。

例えば、フランスでは新築のアパートの方よりも、築40年ほどの古いアパートの人気があり、入居希望者があると断たないケースがあります。何故かといふと、

うと、家主が先導して出来たしっかりとしたコミュニティがあることによって、楽しく安心して過ごせる環境が、初期衝撃となっているのです。いま、コミュニティが崩壊したといわれる中で、アパートやマンションで、この様な積極的な取組が望まれます。

好例として、フランスで始まった「隣人祭り」と言うコミュニティがあります。始まって12年ほどで世界28ヵ国、120万人以上の規模にも広がり、一昨年から日本でも、「隣人祭り」を実行しているケースもありますので調べてみて下さい。

最近は、相続放棄をする遺族が増加しており、従って遺品整理も放棄してしまい、家主が遺品整理の費用を負担せざるを得ない状況も増えています。一方で、家主用に遺品整理の費用も負担する保険も出来始めています。

● 孤立死の可能性を減らすには

孤獨死しないためにはどうすればよいでしょうか。依存度が高い人に対しては、自立度を高めれば当然、孤獨死をする可能性は減ります。また、1日2人以上の人と必ず柴浴をすれば、孤獨死の可能性は極端に減少します。家族や親友は基本的にはあってしないで、気軽に友だちを沢山つければ、突然死しても、すぐに発見してもらえやすくなります。

自分が何歳まで生きるかを決めて、それに沿って残された時間、やりたいことや行きたい所を決めましょう。つまり、距離と行き先=目的を決めるのです。おのずと優先順位が決まります。この様な意識を持って生きるという場合は、毎日が充実しますので、人間関係が途切れることなく、孤獨の危険は減ります。

歳をとったときに、あまりに質素に生活している人も、周りから忘れられやすくなる危険です。多少わがままで、少し可憐がある人は、周りから忘れられにくいで。

最近、遺品整理の事前見積りのお電話が増加しています。大半(8割)が女性で、ご本人からです。その方々は、葬儀などの死後のことには万全に準備しておられるのですが、自分の遺品の片付けだけは自分でできないことに、頬を抱えていらっしゃった方々です。現在は、毎週数名の方から相談のお電話があります。

(以上、いま話題の「無縫社会」について、大変示唆に富んだお話をでした。)

(まとめ 編集 鹿野)

2010年12月